

1 中国へのあこがれ

いつごろからかはっきりしないが、かなり昔から中国へ行ってみたいと思っていた。その動機の一つは、歴史で学んだ遣唐使、遣随使である。大きな危険を知っても止まなかったあこがれの中国。京都のモデルとなった長安。そしてさらに古くは日本列島の母体である中国大陆、我々のルーツ。こんなものが長いこと私の中で醸成されてきた。

さて訪中前私の触れた中国はというと、一つはサンフランシスコのチャイナタウンである。アメリカの日系人がコミュニティはあるもののどこか心細げに感じられたのに対し、チャイナタウンの中国人は実にたくましく感じられた。彼等は地球上どこでも自分の住み家とする様なバイタリティを感じさせた。

もう一つの中国はアメリカで知り合った台湾からの中国人である。劉家の長女思佳（シーチャ）は私の娘と英語のクラスが同じだったため、家族ぐるみで付き合うようになった。彼らは、はじめ強い警戒心を示したが、やがて心を開いた。そこで驚いたことは、彼等の示す情感が非常に日本人と近いことである。もっと言えば、日本人よりもっと古きよき時代の日本的なのである。アメリカ人に接する時に比べ発想の転換を必要としない。これは我々が帰国後の話であるが、娘の白人の友達からの手紙は、“友達が沢山できて楽しくやっているよ”と言って来るのに対し、思佳は“あなたがいなくなってから友達がなくてきみしい”と言って来る。どちらも娘への思いやりが感じられるが表現は大分異なる。ただ発想が日本人と似ている点はあるが何か日本人と異なるところも感じさせる。どこか心の広さを感じさせる点も私の心に残った。

もう一つの中国は、学習した中国、せっかく中国へ行くのだからと思い、中国の歴史の本⁽¹⁾を買い込み勉強した。はてしなく繰り返される他民族の侵略、抗争。それらの中を生きのびる中国人。そして何度か現れる民族を越えて人類は文化で統一されるべきだという理想政治。それらを見ると彼等の国際感覚は日本人の比ではなかりと想像される。しばしば行われる極端な政策。同一民族内の激しい権力争い。中国の歴史にみる権力争いのすさまじさは、だいたい日本のそれと異なる様に思われる。策略、陰謀、裏切り、権力への執念のすさまじさ。これに比べると日本のそれはだいたい淡泊、良く言えばいさぎよく思える。そしてそれらの政治に興味を示さないというか、あきらめている感じの民衆。“どんな人なんだろう中国人は”私の中に中国に対する興味

が爆発寸前までふくらんだ。

2 中国への長い道のり

学会に論文が通ってから北京空港へ到着するまでの道は遠かった。最も私を混乱させたのは中国側の旅行者受入れシステムが見えないことである。これは中国側の受入れ体制が過渡期に有るせいもあるが、多くの情報が有り、どれが本当かわからない。例えば、“中国内は通訳無しでは歩くことは許されない。”とか、“中国のホテルは全て国が管理していて勝手に予約したりできない。”といった類のことである。特に私の事情が悪いのは、学会の主催がアメリカで、アメリカのM社が中国への学会ツアーを委託されていたことである。私は最初、日本の旅行社に手続きをしてもらおうと考え旅行社に問い合わせたところ、私の場合完全な旅行者ではないので団体には入れないし、個人にすると通訳が付くので高くなるとのことであきらめ、M社のツアーに入ることにした。M社は不手際が多く、航空券の手配など出発ぎりぎりまで気をもませた。次の問題はVISAであった。アメリカからは中国からの招へい状なしで中国大使館からVISAが出るという連絡をもらったので、中国大使館へ電話すると、招へい状の無い人にVISAを出すシステムは無いという横柄な対応。しかし、大使館へ行けば出るということを幸い友人から聞いたため、出向いてみると簡単に出了。官僚主義とは聞いていたが何という対応だ中国は。というのが中国のイメージを暗くした。つけ加えておくと、この後もトラブルは続き、切符を買った航空券が成田へ行ってみるとキャンセルされていたり、やっとキャンセル待ちで乗った飛行機は北京を目前にしてカミナリのため着陸出来ず、天津空港で機内で待つこと7時間、結局5時間のところ12時間かかってしまった。

中国内を個人旅行する方法はあまり知られていない。今後行く人のために少しアドバイスすると、中国内の旅行は主な大都市は自由である。中国内を歩くのに通訳を付ける義務もない。ホテルも中国へ着いてから電話で予約できる。たぶん日本からも予約できると思われる。私はこのことを皮肉にも学会で会った米空軍の人から聞いた。彼のツアブックには個人旅行の手引という部分がかなりのページとられていた。私のガイドブックには旅行社発行のせいもあり個人旅行のことはほとんどふれられていない。中国を自分の庭の様に自由に歩きまわるのはやはりアメリカ人のようである。

3 中国にて

中国に着いて最初に感じたことは家がレンガでできているということとレンガの塀が多いことである。我々は家は木で作るものと思っているが中国ではレンガで作るものと思っている。我々から見ると何か冷たい家を連想するが彼等から見ると木の家は粗末と思うであろう。塀と治安の関係はよくわからないが治安の悪いアメリカがあまり塀で庭を囲わないのに、治安の良いといわれる中国が塀を作るのは面白い対称である。ちなみに万里の長城は英語でGreat Wall（大壁）であるから中国人は塀の好きな民族なのかもしれない。

中国人を見て先ず驚くのは足が長いことである。私のルーツは中国ではないかというロマンはふき飛んでしまう。ルーツをたどるにはモンゴルあたりまで北上する必要があるであろう。

次に感じたことは北京の人々の表情である。皆満たされた安らかな顔をしている。よくアメリカ人を老人の様なやさしい表情をしているというが、中国人は少年の様なやさしい顔をしている。これからいうと日本人は激しい壮年の表情というところだろうか。

私の滞在は1週間で私の接した中国人は限られているが私の印象を少し述べてみたい。中国の一般人は英語も日本語も通じない。私は言葉を使わずに何人かの人々に道を聞いたがみな親切に教えてくれた。なかには忙しい店をおいて私をバス停まで連れていってくれた人もいくらかいた。店員のマナーの悪さを聞いていたが私の接した何人かは大変良い。日本のデパートの売らんかなの見えみえのサービスに比べると、彼女等は、店員としてより個人としての意見を言ってくれる感じで好感が持てた。

観光では、先ず北京市内、故宫、頤和園、天壇公園などを見た。いずれもスケールは日本に比べて大きく、何かホッとするものを感じるが人間三十を過ぎると感性が鈍るのかあまり驚かない。“予想していたほどではないな”と少しがっかり。しかし、万里の長城はちがった。スゴイ！コレハスゴイ！という感じである。視界の行き着くところまで続く山並み。そしてその山並みの見えなくなるところまで壁は続く。さすがにこれには驚きを隠せなかった。

学会は香山飯店で行われた。香山は北京の北西30Kmぐらいに位置し、高さは500mぐらいに思われた。香山頂上へはリフトが有り約15分ぐらいの行程である。リフトからは中腹の寺院が見え、漢文の教科書からぬけだした様な風景であった。学

会をはじめての中国ということもあり盛況で、参加者を抑えなければならなかったと聞く。中国側の力の入れ方もかなりなもので、大臣クラスの人が主催したパーティも北京飯店において行われた。ただ中国を訪問した者にとっては、はじめての中国ということもあり物見遊山の傾向が強い。夜行われることになっていたパネル討論会はアクロバットショーと重なりパネル討論会の方が破れ去った。

学会ではパーティが催されるが研究者にとっては知り合を作る良い機会である。私も何人かの人々と会っているうち楊という中国人と親しく話す機会を得た。彼は中国科学院計算所に勤務する研究者である。彼とは中国要人がよく電総研に来ることなどを話したところ、彼はテレビで電総研の様子を知っている等のことで話がはずんだ。ついでに計算所を見学できるか聞いたところ翌日さっそく見学をアレンジしてくれて見学のはこびとなった。研究所はかなり古い建物であったが、どことなく伝統を感じさせる。私は計算所内を数箇所見学した。最初に見学させてもらった計算機はC R A Y 1（スーパーコンピュータ）を模したベクトル計算機で性能はC R A Y 1の半分だそうで、1979年の作だそうである。端末室にはサンヨーのテレビが端末として十台ぐらいならんでいた。御自慢は静電プリンタで自動車の自動設計結果を出力していた。次の研究室ではパーソナルコンピュータを用いたワードプロセッサの実験を見た。日本ではだいぶ普及して来たワードプロセッサであるが、中国ではまだ研究所段階である。しかし、中国のワードプロセッサの完成度もなかなかのものであった。最後に私は人工知能の研究者と話す機会を得た。彼等のレベルは高く、かなりの英語を話す。ただ中国での研究情報入手はまだまだの様子で、十分な情報を持っていない故の不安とか、偏見が感じられる。我々が十年ぐらい前アメリカの論文を必死になって集め解読していたころによくにている。中国もあと十年もすれば世界一級の計算機を作り出せるかもしれない。

楊氏には見学の後昼食をごちそうになり、いろいろ話を聞くことができた。我々が計算所を出たのは11時45分ぐらいであったが、道路はもう自転車のラッシュであった。彼によると、昼食は普通家で食べるため帰宅ラッシュなのだそうだ。昼は正式には12:00～2:00だが15分ぐらい前には仕事をやめ帰路につくとのこと。我々が12時のチャイムを聞いてから食堂へ向かうのに比べると中国の方が自由である。中国の不自由は何といっても職業選択の不自由である。楊氏も奥さんの勤務地が天津なので単身赴任中とのことであった。もちろん、なかなか勤務先をかえられないとのこと。我々から見ると何と非人間的と思えるが、彼等はさほどそう思っていないのかもしれない。アメリカで会った何人かの西洋人は日本の終身雇用性を知り、“とても自由の国とは言えませんね”と言っていたのを思い出す。

彼と入ったレストランは中国人用レストランとしては高級な方だそうである。店内には農民が多く満員であった。ほとんどのテーブルで何本もビールを取り、山の様に皿をテーブルの上に乗せて食べていた。“皆、随分食べるのですね”と言うと、中国では昼

が正餐とのこと。又、彼等は沢山注文して沢山残す。“金持ちになった気分になっているのですよ”とのことであった。せっかくの機会なので一寸と失礼と思われる質問を試してみた。

先ず、“中国では政治について議論しますか？”と聞くと、“以前は議論できませんでしたが、今は自由で批判もよくします”とのことであった。又、中国人はよくひげを剃っていないことについて聞くと、“あれは電気カミソリが無いので無精ひげです”とのことだった。

短期間の滞在中に長時間話す機会を得たもう一人の中国人は魏麗華さんである。彼女はその名のとおりの大変美しい女性で、香山飯店の案内の人で万里の長城へのバスで一緒になった。彼女は日本語の勉強をしているとのこととでリングホンの日本語テキストを持ち歩き勉強していた。一寸リングホンのテキストを見せてもらったら、その内容は高く、なかなか難しいものと思われた。例えば、“山田さんはまだお着きになっていらっしゃらないのですか？”といった敬語を使ったものが多かった。これからみると、英語は単純である。言葉がわからなくなれば、筆談に頼るが、これもなかなか難しい。日本と中国で使う漢字が異なるものや、略字の違いが会話を難しくする。絹の道ぐらい通じるだろうと思うとため。絹の道は丝绸之路と書くそうである。自動車は汽車、バスは班車、手紙は中国語ではトイレットペーパーを意味するし、妻は愛人と書くそうである。彼女との会話で一つ気になったのは、私が“香山飯店には美しい女性が多いですね”と言った時である。彼女は一寸不快そうな顔をした。私は、“あなたは美しいですね”と言わなかったのがいけなかったのかと思ったが、帰国後読んだ本によれば、中国女性に“美しいですね”と言ったり新婚女性に“何人子供が欲しいですか”等と聞くのは失礼に当たるのだそうである。我々は女性に年を聞く西洋風失礼は知っているが、非西洋の失礼については無知であることを知る。ともあれ、若い美しい女性との筆談は中年のおじさんにとって幸せな一時であった。

何人かの中国人と話して気付くことは、会話に無理がなくとぎれないことである。原因は顔付きが似ているので安心できるということもあるかもしれないが、我々が中国文化について、だいぶ知っていることにある。漢字が同じなことだけでも西洋に比べると有利だし、漢文や大衆文学（水滸伝、三国志、西遊記）等を通しての知識も豊富である。これらが会話をどれほど楽しく豊かにするかは計り知れない。国際交流を深めるに当たって相手の文化をある程度知っていることは重要である。ヨーロッパの人同志は、会

えばすぐ友達になれる。これに比べて、日本人は交流が下手で、国際感覚が悪いなどと言われるが、日本人には少し気の毒である。ヨーロッパ人同志は多くの文化的共通基盤を持っているのであるから。私が学会で会ったスウェーデンの人は、私に漢字の馬は馬の形に似ていますねと言ってきたので、象形文字の話をしてあげたら、“あなたは日本人なのにどうして漢字を知っているのですか”と聞いてくる。我々の西洋に対する知識だってそう変わりはないであろう。となれば、西洋人と次々と話題を発展させて会話を楽しむのは、そう簡単なことではなからう。

日本人の国際感覚のなさは、西洋中心の社会において特に顕著になるということである。

4 中国を語る時

中国から帰った人から、“中国は遅れている”とか“貧しい”とか言うのをよく聞く。又、中国報告の書物中で中国近代化のために新に発生している問題点を、日本人の現在の立場から語ったものも少なくない。これらのことは、確かに誤ってはいないが、我々はもう少し現代中国を歴史の流れの中で見る必要があるだろう。現在の中国は日本に比べれば物質的に貧しいことは確かであるが、長い間、中国人の90%以上が食うや食わずの生活をしていたことを考えると、今の中国は皆食べるのに困ってはいない。中国人が安らかな満たされている表情をしている事からも分かる。現時点だけを我々の観点から見て語るのは早計である。そしてもう一つ忘れてはならないのは戦争である。日本の侵略が中国へ与えた被害は少なくない。そして我々は賠償を払っていない。中国の貧しさと、日本の繁栄にこれが影響を与えていることは明らかである。私は中国人と接する時、いつも心の中に後ろめたさを感じる。戦争のことを中国人は忘れてはいないし、最初に謝罪すべきか否かを。しかし、私の中にわざわざ触れたくないという気持ちも有り、いつも触れずに過ぎてしまった。私の勇気ある友人は中国人に、“自分の祖先が、あなたの国に迷惑をかけて申し訳ないことをした”と謝ったと言う。そうしたらその中国人は、“あなたが戦争についてお詫びを言ってくれた最初の日本人です”と感激していたと言う。私が渡米中は教科書問題がおこった時で、アメリカでもこのことを含め、中国での多くの日本軍の蛮行が報道されていた。これらの中には日本のテレビでは見たことのないような、とても正視できないものもあった。当事、不勉強だった私は、“教科書にとやかく言うのは内政干渉だ”ぐらいに思っていたが、歴史を勉強していくにしたがい、又中国及び東南アジアの国々の教科書に出ている戦争記述を知るに

いたり、日本の教科書の戦争記述の不十分さと偏向に気付く。私も日本人である以上、あまり触れたくない気持ちがわからないではないが、我々のためにこそ、正確に記す必要が有ろう。

5 帰国後

以上述べてきたように、私に映った中国人は様々である。それら中国人はそれぞれ場所、環境が異なるという点はあるが、彼等の中に共通に流れる価値、人生観があるように思えてならなかった。その結果、何度も東京の大きな書店に足を運び中国人論を買いあさる結果となった。中国人論の中で、私の疑問に答えてくれた主な本は本文末の参考資料にあげたアグネス・チャン氏⁽²⁾、丁秀山氏⁽³⁾、陳舜臣氏⁽⁴⁾のものであった。もちろん、ここで中国人論を書き出したらきりがないので、本文にあらわれた中国人像に関する私なりの解釈を簡単に記することにする。

先づ日本人との共通点で言うと、根本は儒教に根ざすものであろうが、恥とか面子を大切にするとところであろう。そして、中国人が感じさせるバイタリティーは強い同郷意識、ファミリー意識、そして自分の考えを第三者に認めてもらうため、激しく主張しあう態度であろう。又、中国人が我々に与える心のゆとりは大陸的とか言われるものであるが、具体的には長期的展望、細かいことを気にしない、忍耐強さ、諦め、無関心等のキーワードである。大人物の腹は大きく、つまらぬことは気にとめないという一つの理想像もいきている。長期的展望と言えば、ある中国人が“今に中国も日本に迫り着きます”と言うので、“それはいつごろですか”と聞くと“200年後ぐらいでしょう”と言ったという。戦争の賠償を日本に要求しなかったのも、今お金を取っても今度は日本の人が苦しみ、友好は難しくなるということだそうである。忍耐強さは長い歴史に耐えてきた結果でもあろうが、侵略や極端な政策や搾取を許す原因となっていることも明らかであろう。

中国人論は、大変興味深く、とてもこんな短い所で語れるようなものではない。ここで先に紹介した本の中から二つのエピソードを加えておくことにする。アグネスは、香港で放映されたアタックNo. 1を見て驚いたという。その中でしばしば使われる頑張るという言葉とそれの持つ悲愴感を漂わせる努力は中国にはないという。頑張りに近い言葉を強いてさがせば“加油”だそうで、もっと明るいものを感じさせるのだそうである。日本人はこんな無理をしている民族なのかと思ったとある。

又、丁氏の書の中で示される中国人の性格をあらわすエピソードとしては、“注文したビールのジョッキにハエが入っていたら、アメリカ人はウェータを呼んで交換させる。ドイツ人はウェータを呼び、怒鳴ってビールを捨てて新しいのを持ってこさせる。中国人はハエを取ってビールを飲む。ロシア人はハエに気付かず一気に飲み干す

というのがあり、少なくとも中国人に関しては当たっているとのことであった。

中国の一般人に関しては以上で大体つじつまが合うが、歴史に現れる権力抗争のすさまじさ、政治にかかわる態度は、どこか日本人と異なる。明をおこした洪武帝は、帝位を子孫に伝えるため、建国の臣、文人、高官、その家族等数万人を粛清している。この種の粛清は何度あったかしのれない。又、呉王をいさめて逆に死をたまわる伍子胥は最期に“自分の墓に植えた梓で王の棺桶を作れ、又、自分の目をくりぬいて呉の東門に置け、この目で呉の滅亡を見とどけてやる”と言ったそうだ。これらに関しては陳舜臣氏の“日本人と中国人”がよく記している。中国では政権が代わると政策が極端に変わったり、過去の政権に関する物を徹底的に破壊したりすることがしばしば行われる。これは異民族の侵略というような場合もあるが、かならずしもそればかりではない。陳氏によれば、日本の長い戦闘体質と中国の官僚国家体質の違いと指摘している。戦闘体質では、力と言う絶対的基準が有るので根底的变化が行われにくいのに対し、官僚体制では理念や思想による政治が行われるため、極端な政策が行われやすく、相入れないものを排除する力が強いのかも知れない。又、中国人の権力への執着と権力への行動形態のすさまじさは、陳氏によればこれは中国人の無神論と人間至上主義によるもので、日本人はここに“もののあわれ”を持ち込むので淡泊になるのだそうである。

6 最後に

最近私は、世界の教科書に、日本がどう紹介されているかを記した本を読んだ。⁽⁵⁾最初は、きっと明治時代の日本が紹介されているのではないかという様な気で読み進んでいたが、分ってきたことは日本がかなり正しく紹介されているばかりか、いくつかの国では、日本人がどのような価値観を持ちどんな思考法をしているかまで掘り進んで議論している事が分る。

一方、日本の社会科といえ、どこの国で何がどれだけ取れるといった暗記一辺倒の無味乾燥なものである。このような教育を受けると、世界中皆同じ価値観で動いていると思いがちだし、もし思わなくても外国との文化的共通基盤の少なくない日本にとって世界の人々の考え方を知ることは難しい。たとえば日本から見ると、よくわかっていると思えるアメリカにしても“日本はアメリカと同じ自由の国だ”と書いていたりする。アメリカの自由のスケールの大きさは、日本の自由の比ではない。こういうことがわか

らないと日本の異常とも思える管理体制に気付かない。

日本人は、よく外国人に日本の特異性を指摘してもらって悦にしている。日本人論も好んで読まれる分野である。しかしそれらはいずれも日本という座標に立ち、日本中心にしての議論である。これから国際化が進んで行く時最も我々が知らなくてはいけないのは、日本が世界からどう見えるかではなく、世界の人々がどのような価値観を持ち、どんな思考法をしているかである。これが分れば自ずと自分の思考法が見えてくるはずである。自分の立場での自分しか見えないと、しばしば行きづまってニッチもサッチも行かなくなったり、また時として一つの誤った方向に突っ走ったりする。

ともあれ、世界中のいろいろの人々と接する機会を持つと、どの人々も愛すべき人々で、どうして戦争などやらなければならないのかと強く感じる。一向に止む気配のない軍拡競争は異常としか言い様がない。世界の多くのリーダ達の異常が科学的に証明され、一日も早く平和な世界が出来ることを願ってやまない。

参考資料

- | | | |
|------------|--------------|----------|
| 1 陳 舜臣 | 中国五千年 (上 下) | 平凡社 |
| 2 アグネス チャン | ひなげし語録 | 現代出版 |
| 3 丁 秀山 | 中国人の生活哲学 | 東方書店 |
| 4 陳 舜臣 | 日本人と中国人 | 祥伝社 |
| 5 NHK | どう映っているか日本の姿 | 日本放送出版協会 |
| 6 杉本良夫 | 超管理列島ニッポン | 光文社 |